

論文審査の結果の要旨

学位申請論文の表題は ”Predictors of Subacute Hematoma Expansion Requiring Surgical Evacuation After Initial Conservative Treatment in Patients With Acute Subdural Hematoma” であり、Acta Neurochir (Wien). 2020 Feb;162(2):357-363 誌に受理された。申請者が筆頭著者であり、指導教員の栗田教授がラストオーサーである。本研究は、既存資料・情報を用いた研究であり、2019年3月6日付の研究に関する決定通知書にて埼玉医科大学国際医療センター臨床研究 IRB で承認されている。剽窃検知ソフト使用確認書の添付を確認した。当該論文の要旨は以下の如くである。

背景：この研究の目的は、入院時に保存的に治療された急性硬膜下血腫（ASDH）患者の亜急性手術の必要性に関連する要因を明らかにする。

方法：2007年から2018年に当院に入院した ASDH 患者のうち、当初は保存的に治療された 200 人の患者のデータを retrospective にレビューし、患者の特性、病歴、放射線所見、臨床転帰、亜急性手術を受けた患者と手術を受けていない患者の違いを比較した。

結果：保守的に治療された 200 人の患者のうち、17 人（8.5%）の患者は臨床および/またはコンピューター断層撮影（CT）所見の悪化により亜急性手術を受けたが、183 人（91.5%）の患者は亜急性手術を受けなかった。2 つのグループ間で、神経障害、mRS、正中線シフトの程度、血腫の厚さ、血腫の体積、cella media index, Sylvian fissure ratio, 血腫密度の存在に有意差があった。

結論：大型の血腫、脳萎縮の程度、CT 上の血腫の density は、入院時に ASDH で保存的に治療された患者における亜急性手術の必要性の有用な予測因子である。

栢原 智道氏（国際医療センター脳神経外科学）の学位審査委員会は6月12日に川越キャンパスで開催され、委員全員が出席した。はじめに申請書類により資格条件が満たされていることが確認された。この後、約 20 分の口頭発表ののちに質疑応答が行われた。

質問の内容は以下の如くである。

1. 頭部外症ガイドラインに沿って治療していれば、亜急性期に硬膜下血腫の手術をしなかったのではないかと？
2. 抗血小板薬の使用の有無が亜急性期に手術をすることの危険因子にならないのはどうしてか？
3. 手術の時期が急性期、亜急性期、慢性期の3群に分けるのが良いのではないかと？
4. 手術を急性期にせずに後回した場合、退院時 mRS が手術していない群に比べて悪くなっているのはなぜか？後回しにした患者への機能予後が悪くなっていることは、手術の時期に問題があるのではないかと？
5. 通常であれば、手術後3ヶ月あるいは、半年後の mRS で比較するのではなからずか？
6. 大型の血腫、脳萎縮の程度、CT 上の血腫の density が亜急性期に手術になる可能性があるかと論じているが、各々の因子についてどのように説明できるのか？
7. この論文を通じて何が一番の科学的に新しいことなのか？

栢原 智道 審査結果の要旨

など、各審査委員から厳しい質問が寄せられたが、申請者は、それぞれ適切に回答をし、申請者自らが本研究の実施、結果の解析及び論文作成に深く関与していることが確認された。申請者の学識、態度、人格は、本学の学位授与に相応しいものであり、学位審査委員会は「適格」と判定することと結論した。